

保育者養成課程における表現関係科目の教育内容に関する研究(1)

著者	新實 広記, 藤重 育子, 西濱 由有, 矢藤 誠慈郎
雑誌名	東邦学誌
巻	41
号	3
ページ	141-162
発行年	2012-12-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000293/

保育者養成課程における表現関係科目の
教育内容に関する研究（1）

新 實 広 記
藤 重 育 子
西 濱 由 有
矢 藤 誠 慈郎

愛知東邦大学

保育者養成課程における表現関係科目の 教育内容に関する研究（1）

新 實 広 記
藤 重 育 子
西 濱 由 有
矢 藤 誠 慈 郎

目 次

- 1 研究の目的と方法
- 2 造形表現に係る科目
- 3 言語表現に係る科目
- 4 音楽表現に係る科目
- 5 まとめ

1 研究の目的と方法

（1）研究の目的

本研究の目的は、保育者（幼稚園教諭及び保育士）の養成課程における、子どもの表現に関係する科目において、どのような教育内容が教授されているかについて明らかにすることである。

本研究が対象とする表現関係科目とは、①幼稚園教員養成課程における「教職に関する科目」の「保育内容の指導法」の保育内容「表現」に係る科目と「教科に関する科目」（国語、音楽、図画工作、体育）、②保育士養成課程における、「保育の内容・方法に関する科目」の保育内容「表現」に係る科目と「保育の表現技術」（身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等）である。

基本的に、①の前者は教科教育学の研究者、後者は教科そのものの専門家が担当する内容を有していると思われる。つまり、例えば音楽表現に関わる科目であれば、前者は音楽科教育学を専門とする者、後者は音楽の演奏や理論を専門とする者が想定される。しかし、印象として、幼稚園教員養成課程においても保育士養成課程においても、実際の運用においては担当者の専門性がそのように明確に区別されているわけではなく、教育内容もさまざまである。したがって、就学前の子どもの「表現」に関わる科目群において、その内容や運用の実際がどのようなものとなっているかについて調査し、表現関係科目の課題について検討していく。

これらの領域を表現関係科目として包括的に検討する理由は、保育士養成課程等検討会「保育

士養成課程等の改正について（中間まとめ）」（2010年3月24日）において打ち出されたように^[1]、子どもの「表現」あるいはそれを豊かにするための保育技術は、分断されたものではなく、総合的に検討し、考察していく必要があると考えるからである。

保育者養成における表現関係科目の教育内容についてシラバスの検討を行った研究には、伏見（2008）などが見られるが、管見の限り、それらの研究は上述の領域のうち、特定の科目に限定した研究に留まっている。

（2）研究の方法

本研究においては、研究の端緒として、公開されているシラバスを分析する。その際、ウェブ上にシラバスが公開されている、東海・北陸を中心とした、保育者養成課程（幼稚園教員養成課程及び保育士養成課程）を備える4年制大学33校を対象として、関係科目のシラバスを抽出して分析した。なお、執筆者の専門性を踏まえて、音楽、造形、言語の3つの領域に限定して調査した。また、保育者の養成課程だけでなく小学校以上の教員養成課程を併設している大学では、科目のあり方が異なってくる場合があり、現時点では厳密な分析に至っていない。

（矢藤誠慈郎）

2 造形表現に係る科目

（1）分析の視点

子どもにとって、つくる、描くといった造形表現活動は、感じたことや考えたことを素直に表現できる大切な活動であると同時に、美しいものや心をうごかす何かに出会ったときの心のあり方が感動や感性につながっていく大切な時間である。教員や保育者は、そういった子どもの造形表現活動を理解し共感するためにも、子どもの造形の発達と特徴や、子どもと大人の認知、世界観の違いを理解する必要がある。

各々の大学では工夫を凝らし、さまざまな造形表現に関するカリキュラムを生み出しているが、これらの授業科目が現場で役立つ技能を身につけさせるために、どのような目的と内容で計画されているのか、各大学のシラバスから次の項目において分析を行った。「授業科目名」、「授業の概要」、「区分・単位」、「対象学年」、「教科書・参考書」、「担当教員」、「授業計画」の6点についてである。

（2）分析の結果

1) 授業科目名について

調査対象である33大学の造形表現に関する授業科目名について表2-1に示す。56種類の科目名が見出された。そのうち、授業科目名に多く使われている語彙として「図画工作」67科目、「造形」28科目、「表現」26科目、「保育内容」13科目、「子ども（こども）」12科目、「指導法」11科目であった。

これらの語彙のなかで主に「図画工作」が小学校の造形表現活動を対象とし、「保育内容」、「子ども（こども）」、「表現」が幼児期における造形表現活動を対象とした科目名に使用されていた。多くの大学が子どもの発達と造形表現活動の特徴を考慮した授業を行うために小学校と幼児期を分けたカリキュラム構成がされている。例えばA大学では、「図画工作」、「図画工作教育法」、「保育内容（造形表現）」、B大学では「基礎造形1」、「基礎造形2」、「図画工作科教育法」、「幼児の造形（指導法）」のように構成されている。

ただ、ごくわずかではあるが造形表現の授業科目名がC大学のように「図画工作Ⅰ」、「図画工作Ⅱ」、「図画工作科教育法」といった小学校「図画工作」の語彙だけの授業科目で造形表現のカリキュラムが組み立てられており、「保育内容の研究・表現（総合）」といった授業があるが造形表現を重点に取り扱った授業内容ではなかった。しかしながらC大学の「図画工作Ⅰ」の授業内容を調べてみると、幼児期の造形表現活動を考慮した授業内容が含まれていることがわかった。このC大学のような造形表現に関する授業科目において、小学校と幼児期を明確に分けていない大学は、「図画工作」や「幼児」の特定の範囲を示す語彙を使わずに「造形」、「こども」などの幅広い範囲を示す言葉で科目名を表現しているようだ。例えばD大学では、「保育指導法（表現）」において造形表現を中心に授業計画が行われていないため「こどもと造形Ⅰ（造形能力の発達）」、「こどもと造形Ⅱ（基礎的表現）」、「教科教育法（図画工作）」と表現されている。

また、教職に関する科目と教科に関する科目の名称を比較すると、教職に関する科目はある程度のまとまりがあることがわかった。29の教職に関する科目のうち15科目が「図画工作教育法」という同じ科目名であった。また、28科目には「図画工作」、13科目には「保育内容」の語彙が含まれていた。これは、小学校図画工作指導要領、保育所保育指針、幼稚園教育要領をもとに学習指導計画や評価方法などを学ぶ授業計画がつけられているため、授業の目的が統一されやすく科目名が多様にならないようだ。それに対して教科に関する科目においては、担当教員のねらいや目的、大学のカリキュラム構成の違いによって科目名も多様になっているようだ。例えば「造形の臨床的授業研究」、「発達美術論」といった科目名もみられた。

表 2-1 授業科目の名称

■教科に関する授業科目名	科目数
図画工作	17
図画工作（講義）	1
図画工作（実技）	2
図画工作科基礎	6
図画工作実習	2
図画工作研究	2
図画工作科指導法基礎	1
図画工作内容論	1
図工	1
こどもと造形（造形能力の発達）	1
こどもと造形（基礎的表現）	1

子どもと図画工作	5
子どもと表現	1
子どもと表現（総合表現）	1
子どもと表現（造形表現）	1
子どもの芸術活動と学び	1
乳幼児の造形演習	2
幼児造形	1
児童造形	1
基礎造形	2
造形基礎	4
造形表現演習（保育）	1
造形実技（素材研究）	1
造形実技（素材・教材研究）	1
造形実技（絵画・造形表現）	1
造形専門研究	2
造形遊び	1
造形の臨床的授業研究	1
総合造形表現	1
初等図画工作	2
初等図画工作科内容学	1
小学校専門美術	3
発達美術論	1
表現	1
基礎技能	1
小計	72

■教職に関する授業科目名称	
保育内容の研究（造形表現）	1
保育内容の研究・表現（美術）	2
保育内容指導法（生活と表現）	1
保育内容（表現）	6
保育内容（造形表現）	2
保育内容研究（感性と表現）	1
保育指導法（表現）	1
子どもの表現（指導法）	1
幼児の造形（指導法）	1
幼児の表現指導法	1
造形表現（指導法）	1
造形表現学習過程特論	1
図画工作科教育論	1
図画工作教育法	15
初等教科教育法図画工作	1
教科教育法図画工作	2
初等図画工作科教育法	2
図画工作教材研究	1
低学年図画工作	1
図画工作科指導論	1
図画工作指導法	3
小計	46

2) 授業の概要について

授業の概要に関しては、大学によって「授業の概要」や「授業目的」、「授業の観点」など異なる表現でシラバス上に記載されていた。また、その内容は抽象的なものから具体的なものまでさまざまであった。内容については以下に、教科に関する科目と教職に関する科目にわけてそれぞれの科目で求められている「理解」と「養う力」について分析した。

まずは、教科に関する科目の授業では、「理解」に関して、以下に類する内容が多く書かれていた。発達に関する理解として、「幼児の育ち」、「描画の発達段階」、「発育段階に即した」、「幼児期特有の造形表現」。造形表現に関する理解としては、「表現の楽しさや喜び」、「子どもの造形表現活動の追体験」、「体験を通して楽しさを知る」。教材に関する理解として「基礎的な材料」、「素材の性質」、「素材の味わい」、「素材の多様性」などであった。

「養う力」では、造形表現に関しては「ものの見方」、「感じる力」、「創意工夫する力」、「美的感性」、「豊かな感性」、「生活の身近にあるものからの創造力」。指導に関しては「子どもの作品に共感できる心」、「幼児作品を鑑賞する力」、「造形遊びを支援する力」、「造形活動の応用力」、「造形の計画性」。技術に関しては「造形力」、「基礎的な道具の扱い」、「基礎的な描画技法」などであった。

教職に関する科目の授業では、「理解」に関して、以下に類する内容が多く書かれていた。「子どもの発達と造形表現」、「子どもの表現」、「環境のあり方」、「援助のあり方」、「図画工作科における学びの意義と学習指導要領の仕組み」、「学校図画工作の理論と実際について」。「養う力」では、「子どもの年齢や状況に合わせた指導案の作成」、「教材研究能力」、「図画工作の総合的指導力」、「授業づくりと指導方法」、「児童に果たす役割」、「題材開発」、「子供の作品を評価し指導する力」があげられる。

授業の概要から、教科に関する科目では、主に発達段階に応じた子どもの表現活動を知識として理解しながら実際に素材や道具に触れ製作することに重点を置いている。これは、子どもの造形表現活動を追体験した上で、指導力を養うことが求められている。教職に関する科目においては、子どもの発達を理解し、造形表現の学びの意義と学習指導要領の仕組み、作品の評価、指導する力を養うことが求められている。

3) 区分・単位について

33大学の102科目が前期または後期という半期区分で授業が開講されており、1つの科目に対して2単位を与えている。11科目で通年の授業が行われている。また、表2-2より27科目が1単位を与えるかたちをとっている。これは授業科目がI、IIやA、Bのように1年間を通して美術教育の授業が設定されている。

また、授業形態に関しても多くの大学で演習の形式をとり授業が行われていることがわかる。それに対して講義、実技のみの授業は非常に少ない。多くの大学で実技だけでなく、子どもの発達に応じた造形表現活動の理解や指導法などを講義との組み合わせで行っているようだ。

教職に関する科目においては、造形表現の総合的指導力を養うために、講義形式を中心にして行われている大学が多いようだ。

表2-2に示した分析では、授業形態・単位数ともにウェブ上からは確認ができない不明なもの40件あった。

表2-2 授業の単位数と授業形態

		単位数			
		1単位	2単位	不明	科目数合計
形態	講義	3	18	2	23
	演習	7	28	6	41
	講義と演習	0	7	0	7
	実技	3	4	0	7
	不明	14	26	0	40
	科目数合計	27	83	8	118

4) 対象学年について

受講者の対象学年に関して表2-3に示す。対象学年には2年生が比較的多いが1・3年生も対象学年となり開講されることが多い。特に教職に関する科目においては、学習指導と評価に関しての内容の授業を行うことが多いためか、1・2年生で教科に関する科目で演習を行い、自ら表現することの喜びや、造形表現の基礎的な材料の理解や基礎技術、表現の楽しさを身につけてから2・3年生で開講されていることが最も多いようだ。

表2-3 対象学年

学年	科目数
1年生	24
1年生以降	3
2年生	38
2年生以降	11
3年生	20
3年生以降	1
4年生	1
不明	20
合計	118

5) 教科書・参考図書について

教科書に関しての掲載は、具体的に記載されている場合とそうでない場合があるため、掲載の有無と詳細について表2-4に示す。

118科目中、指定教科書有の科目は46科目であった。この46科目のうち13科目で、『小学校学習

指導要領解説「図画工作編」(文部科学省, 2008)が利用されており、内9科目が教職に関する科目である。

教科に関する科目72科目においては、17科目が教科書を使用しているが、残りの多くの科目が「適宜指示」や「プリント配布」などと記載している。

表 2-4 教科書についての記載

	記載内容	科目数
記載あり	指定教科書記載	46
	適宜指示	30
	プリント配布	17
	不明	25
	合計	118

6) 担当教員について

科目担当者の内訳を表 2-5 に示す。専任での担当者が多いことが理解できる。担当教員の専門分野を分析した結果、特に多かった分野は絵画分野34科目、彫刻分野23科目、デザイン分野15科目、工芸分野14科目であった。他にも美術史や写真、鑑賞教育を専門とする教員もおり、さまざまな専門分野を持つ教員が授業を担当していることがわかった。

教科に関する科目の授業内容は、担当教員の専門分野の影響を少なからず受けていると思われる。例えば絵画分野の教員の授業内容には、平面表現が多く、彫刻分野の教員には立体表現が多い傾向が見てとれる。担当教員の専門分野のみで授業が行われているケースもあるようだ。例えば陶芸分野の教員が焼き物の授業だけを行うなどがそのケースである。また、同一大学で同じ科目名において2人以上の教員が担当する場合、それぞれの教員によって授業内容が異なっている例がいくつか見られた。

表 2-5 科目担当者内訳

専任・非常勤の別	学校数
専任	100
非常勤講師	17
不明	12
合計	129

7) 授業計画について

全15回の授業計画においては、いくつかの共通する部分が見られた。まず、118科目中38科目で「発達」の語彙が見られ、教職に関する科目では、子どもの造形の発達と特徴に関する講義がほぼすべてで行われていた。なかでも子どもの描画の発達過程や子どもと大人の認知、世界観の違いを理解する授業が多く見られた。

造形遊びに関する内容として40科目に素材の感触や性質を重視した、新聞紙や粘土のような材料を使用した造形遊びが含まれており、18科目に自然を重視した、風、光、音、植物を使つての造形遊びがあり、9科目に動きを重視した造形遊びが見られた。

描画技法を重視した内容としては版画が19科目、水彩画15科目、デッサンは11科目、マーブリング（墨流し）、スタンピング（版押し絵）、スクラッチ（引っ掻き絵）、フロタージュ（こすりだし）、デカルコマニー（合わせ絵）、ドリッピング（吹き絵・流し絵）、ステンシル（孔版）、といったモダンテクニックといわれる描画技法も14科目に取り入れられている。

また、15科目で保育の現場で行われる運動会や誕生日会、学芸会などの行事に関わる内容として、人形の製作やお面の製作、グリーティングカード、壁面構成などの授業がみられた。

保育内容の表現の授業では、造形の授業が独立して15回行われるのではなく音楽と動きを融合したリトミックや手遊び、パネルシアター、ペープサートと共に構成されている授業もみられた。

（3）分析のまとめ

33大学の118科目の分析を行った結果、56種類の授業科目名が見られたことから分かるように、造形表現に関するさまざまな科目名が用いられている。

教職に関する科目は、教科に関する科目に比べて内容がより明確であるためか、教科書の使用が多く、小学校図画工作指導要領、保育所保育指針、幼稚園教育要領をもとに学習指導計画や評価方法などを学ぶ授業計画が中心であった。そのため、授業の内容が教科に関する科目ほど多様ではない。教職に関する科目の対象学年は2・3年生が多く、1・2年生で教科に関する科目で、自ら表現することの喜びや、造形表現の基礎的な材料の理解や基礎技術、表現の楽しさを身につけてから、2・3年生で教職に関する科目を開講するケースが多い。

教科に関する科目においては、教職に関する科目に比べ、授業の概要、授業計画からそれぞれの科目の担当教員の影響を大きく受けていることがわかった。学生が表現の楽しさや喜びを知るために、実技中心で計画された授業や、子どもの造形表現の発達過程を中心に授業を展開していく授業、基礎的な描画技法を重視した内容の授業や素材の感触や性質から展開される造形遊びの授業、現場で必要とされる運動会や学芸会の催し物などの小物製作や、保護者への配布物や教室の環境づくりのために製作するグリーティングカードや壁面構成などの製作を中心に行っている授業など、授業の内容、計画は多様であった。また、教科に関する科目において、担当教員の専門分野と授業内容の関係も見て取れた。

大学の授業では、15回の限られた授業時間のなかで、造形表現について授業計画を立てなくてはならない。しかし、学ぶべき内容としては「発達段階の造形表現」、「造形表現の基礎的な技術」、「基礎的な素材の理解」、「表現の楽しさや喜びの追体験」、「子どもの作品を評価し指導する力」など多様である。これらすべてを限られた授業の中で行うことは実際には難しい。効果的な授業を行うためには、内容の精選と綿密な授業計画が必要であろう。

（新實広記）

3 言語表現に係る科目

(1) 分析の視点

子どもの言語表現に関して、保育者が乳幼児の言葉の発達段階を理解し、その発達に応じた表現方法を用いて保育に携わる必要がある。保育者養成校において、その表現技術を体得する科目が言語表現に係る科目である。言語表現の教授方法に関しては、方法や場面などあらゆる側面からのさまざまなアプローチが考えられ、33大学がそれぞれの特色を持っていることは十分に考えられる。そこで本節では、まず言語表現科目の中でも筆者の担当する「言語指導法」に相当する授業科目シラバスから調査を行った。その際の着目点として、以下の項目に的を絞り分析を試みた。まず、授業科目名や授業の概要について概観し、その後、授業区分・単位数や受講者の対象学年など、授業科目の位置づけについて詳細な分析を行った。また、担当教員の役職や専門分野を把握することにより、15回の授業計画の内容や、指定されている教科書・参考書などについても分析を試みた。

(2) 分析の結果

1) 授業科目名について

授業科目名について表3-1に示す。分析対象である33大学のうち、15大学で授業科目名に「保育内容」、8大学で「指導法」、26大学で「言葉」もしくは「ことば」などの語彙が用いられ、表現されていた。

表3-1 授業科目の名称

授業科目名	学校数
保育内容 言葉	5
保育内容 ことば	1
保育内容研究 言葉	2
保育内容研究 発達と言葉	1
保育内容の研究 言葉	1
保育内容演習 言葉	3
保育内容論 言語	1
保育内容指導法 生活と言葉	1
言葉指導法	1
幼児の言葉指導法	1
保育・言葉の指導法	1
言葉 指導法	2
保育指導法 言葉	1
保育指導法 ことば	1
言葉	2
子どもと言葉	1
こどもと言葉	1
子どもと国語	1

語彙論	1
低学年言語表現活動	1
不明	4
合計	33

幼稚園教育要領「第2章 ねらいおよび内容」において「ねらいは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容はねらいを達成するために指導する事項である」と説明し、その領域を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」としている。そのためこれらの教育要領の内容に則った保育内容や指導法などが授業内で展開されるものと授業科目名から推測できる。また「言葉」という表現が授業科目名あるいは授業科目名の一部に用いられている大学が最も多く、次に「言語」「語彙」「国語」と続いている。保育内容に関しては、1989年に、6領域（健康、社会、言語、自然、音楽、造形）から5領域へと改訂された。そのため、改訂に応じて授業科目名や授業内容を変更している大学が多いのではないかとと思われる。しかしながら未だ、改訂以前の「言語」もしくは「言葉」に代わる別の表現を用いた授業科目名が存在している。この点は、授業の概要や授業計画などを探ることによってその理由を明らかにすることができるかもしれない。本学における「言葉」に関する授業科目は「言語指導法」という科目名で開講されているので、再考を要するだろう。

2) 授業の概要について

授業の概要に関しては、「授業観点」「テーマ」「到達目標」「目標・意義」「ねらい」など大学によって異なる表現方法で記載されていた。また、多くの目標を掲げていたり内容のみ端的に示していたりと表現もさまざまであった。このことから、シラバス上で重要視する内容が大学によって異なることがうかがえる。

まず内容については、子どもの「言葉」に関係する授業科目であるため、子どもの「発達」や「育ち」という語彙は必ず用いられており、成長を表すそれらの語彙は言葉を獲得していく上で欠かせない。また「生活」という表現が多く用いられている理由として、子どもが幼稚園などの保育関係機関、地域社会、家庭などでの言葉の育ちに関して、言語獲得期の子どもの社会的認知、他者認識の発達に研究者が注目している（小山，2006）ことも納得できる。そしてその生活場面で欠かせない「遊び」や「保育者の役割」という語彙も多用されていた。子どもの発達に伴い、発話やコミュニケーションの方法が異なるため、知識として学生に理解させておくべき内容である。さらには教材の選択や保育者の援助方法などの指導内容についても授業の概要では示されていた。

次に、概要の説明内でよく用いられていた表現の一つに保育現場での「言葉」に関わるやり取りなど「具体的な事例」を取り上げている授業の概要が多く見られたことから、教員の技術面において高いスキルが必要であるように思われる。この点は、保育現場経験のある教員が授業を担当しているためか、もしくは実践が掲載されている教科書を用いているためか等、より詳細な分

析が必要である。

さらに、教育課程上「講義」として開講されている授業科目であっても、「児童文化財を用いて」といった例に見られるように実践を組み込んだ内容で授業が進められることが多いように思われる。その内容はさまざまであるが、児童文化材としてよく用いられる道具は絵本や紙芝居であり、それらを用いた読み聞かせなどを学生が行うことが実践の一部であると読み取ることができる。『絵本学のすすめ』の中で浜島（1984）は子どもに対する「絵本の読み聞かせ」ということばが流行り出してから20年以上になると述べており、絵本の読み聞かせの歴史は古く、いかに子どもに読み聞かせが大切かということも理解できる。また西本（2003）によると、手遊びやちょっとしたクイズ、パネルシアター、ペープサート、エプロンシアター、歌などさまざまな遊びを組み込むことで子どもたちはお話の世界に入りやすくなることや行事・季節をテーマに取り入れることも効果的であると指摘している。そのため、読み聞かせの実践を取り入れた授業を行う際には絵本や紙芝居の読み聞かせ技術のほか、上述したような遊びやその表現方法をも学生に教授する必要がある。さらに無藤（2008）によると、教師は幼児が表現したいときに表現しやすい用具や素材を準備しておく必要があることを述べており、言葉を育てる環境を構成する技術も保育者には不可欠であることを示している。保育者は子どもの言語表現を発達させる大きな役割を担っているといえるだろう。

以上のことから、「言葉」に関係する授業科目においては、学生に子どもの言語発達や環境構成について講義の中で知識を理解させることはもちろん、学生自身が子どもの発達に応じて遊びを通した幅広い実践を得て子どもの言語環境を整える技術を身につけることが必要となる。

3) 区分・単位について

多くの大学が前期または後期という半期区分で授業が開講されている。幼稚園教育要領「第3章 保育の内容」の中で、「①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう、②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう、③日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」の3つのねらいが存在する。そのねらいに則した内容を15回での授業で教授するよう計画されている。しかし2大学では、「(授業科目名) I・II」のように1年間を通して「言葉」に関する授業が設定されている。今後、授業計画などを精査して重要視している点は何であるのかを探っていく必要があるだろう。

次に、授業単位数や授業形態について表3-2に示す。授業形態が講義として成り立っている7大学であっても、絵本や紙芝居の読み聞かせなどの実践・実技を含むという追記も見られ、講義のみで修得できる授業科目ではないことが理解できる。しかしながら、単位数や授業形態などはシラバスでは重視されていないためか、記載されていない大学が多く見られた。

表3-2 授業の単位数と授業形態

		単位数			
		1単位	2単位	不明	合計
形態	講義	0	7	0	7
	演習	3	6	0	9
	講義と演習	0	3	0	3
	不明	0	9	5	14
	合計	3	25	5	33

4) 対象学年について

受講者の対象学年に関して表3-3に示す。対象学年には散らばりがあるものの、1・2年生が対象学年となり開講されることが多い。これは、保育内容「言葉」に関する授業内容であるため資格取得において必修科目である場合が多く、できるだけ早い学年の段階で受講し、知識を習得し実習に臨めるようなカリキュラムが取られているのではないかと考えられる。

表3-3 対象学年

学年	学校数
1年生	7
2年生	9
2年生以降	5
3年生	2
3年生以降	1
4年生	1
不明	8
合計	33

5) 教科書・参考図書について

教科書については具体的に記載されている場合とそうでない場合があるため、記載の有無と詳細について表3-4に示す。

掲載のあった17大学で指定されている教科書の詳細については、幼稚園教育要領をはじめ、榎沢ら（2005、建帛社）『保育内容言葉』、大久保ら（1996、建帛社）『保育言葉の実際』、ミネルヴァ書房編著（2008）『保育所保育指針・幼稚園教育要領 解説とポイント』、柴崎ら（2010・ミネルヴァ書房）『最新保育講座⑩保育内容 言葉』、太田ら（2006、同文書院）『保育内容・言葉』、小田ら（2009、北大路書房）『保育内容 言葉』等が挙げられていた。以上から保育内容の言葉の獲得に関する領域「言葉」に関して、保育者の資格・免許を取得して将来子どもの保育に携わるための準備段階として、学生が最低限理解しておくべき内容を踏まえた書籍が多いように見受けられる。また指定されている書籍の多くは、15回の授業で使用するための章立てがなされている。内容として、日常生活場面での子どもへの言葉の指導や保育者としての言葉かけ、幼児同士

の会話などの事例や絵本・物語・劇・ごっこ遊びといった言葉を使用する実践が多く取り上げられている。このような点が、教科書として取り上げられている理由ではないかと考えられる。参考図書に関しても同様、子どもへの言葉かけや実践において活用できるであろう書籍が多く見られた。

表 3-4 教科書についての記載

記載の有無		学校数
記載あり	指定教科書有	17
	適宜指示	7
記載なし	不明	3
		6
合計		33

6) 担当教員について

科目担当者の内訳を表 3-5 に示す。専任教員が科目担当者として多いことが理解できる。しかしながら、22名の専任教員の専門領域を調査したところ、幼児教育学・保育学・幼児教育史・教育方法学・発達心理学を専門とした教員が存在する一方で、「言葉」を語学ととらえ異文化コミュニケーション・日本文学・国語科教育・英語を専門としている教員や、障害者福祉・特別支援教育など福祉関係を専門分野とする教員など、広範囲に及んでいた。このことから、同じ幼稚園教諭の免許取得科目である、保育内容「言葉」関係の授業であっても教授する内容が担当教員の得意分野を取り入れたバラエティ豊かな授業展開になると考えられる。

表 3-5 科目担当者内訳

専任・非常勤の別	学校数
専任教員	22
非常勤講師	6
不明	5
合計	33

7) 授業計画について

全15回の授業計画に関しては、前半、中盤、後半においてそれぞれ特徴が見られた。前半には、幼稚園教育要領の「言葉」領域についての内容やねらいを学生が理解するための学習内容が多く提示されていた。それに伴い、年齢ごとの言葉の発達や、思考や発話を促す方法、教材や教具に関する授業も見られた。また、教科書だけでなくビデオ教材も並行して用いられ、子どもの発達に合わせた保育者の援助方法が学習できるようになっていた。中盤には、学生同士での言葉を伝えるゲームなどの実習を通して気付かせることや、パネルシアターやペープサートなどの製作・実践を通して学生に体験させることで学習を促すような授業内容が見受けられた。後半には、前

述したように担当教員の専門分野が顕著に表れている場合が見られた。「幼小連携」「小学校高学年の言語」や「言語障害」、「言語聴覚士の仕事」等のように、同じ内容を教授する授業科目であっても、受講学生が幅広く知識を得られる内容となっており、担当教員の及ぼす影響は大きいことであろう。また、定期試験が行われることが少なく、レポート課題を数回課すことや児童文化財の発表を行わせることで、学生の理解力と実践力の定着を図っているのではないと思われる。以上のように、「言葉」に関する15回の授業計画においては、調査した中で多くの大学が、ある程度同様の進度や教授方法で進められていることが理解できた。

しかしながら一部の大学ではあるものの、授業計画の中で毎時間使用する教科書の頁数が記載されていたり、事後学習などの受講後に取り組むべき課題が記されていたりと詳細に作成されているシラバスも見ることができた。シラバス作成後、授業を展開していく上で、講義内容が前後することもしばしば起こるが、これらを見る限りでは計画通りに授業が進められていることもうかがえた。

(3) 分析のまとめ

言語表現科目に係る授業科目シラバスを調査したところ、まず授業科目名や授業の概要を概観すると共通点が見出された。授業科目名では「保育内容」、「指導法」、「言葉」などの幼稚園教育要領等における保育内容「言葉」に関する分野に則した表現が科目名として用いられていた。授業の概要では「発達」や「遊び」という、言葉を発する上で重要な語彙が多用されており、保育現場での「具体的な事例」を取り上げているシラバスも多く見られたことから、高いスキルを持つ教員が必要であるように思われる。しかしながら子どもの言葉に関係する授業科目であっても、科目担当者のうち22名の専任教員の専門分野は保育学から文学や福祉など、多岐にわたることが確認できた。次に、使用されている教科書についても幼稚園教育要領等の保育内容「言葉」に則ったタイトルの書籍が多く見受けられた。内容についても、絵本・物語・劇・ごっこ遊びといった言葉を使用する実践が多く取り上げられていた。さらに授業計画においては、前半は講義形式、中盤以降にはパネルシアターやペープサートなどの製作・実践を通して学生に体験させる学習が授業内容に多く見受けられた。

以上のように、言語表現科目に係る授業科目シラバスの分析では、全体的に幼稚園教育要領や保育所保育指針の保育内容「言葉」を踏まえて、ある程度同様の進度や教授方法で15回の授業が運営されていることがうかがえる。そしてさまざまな側面から子どもの言葉に関して教授されており、授業の一部を担当教員の専門分野によって変化をつけられる等、工夫された授業展開が推測できた。

(藤重育子)

4 音楽表現に係る科目

(1) 分析の視点

11県33大学のウェブシラバス上にて保育士、幼稚園教諭、小学校教諭養成校における「音楽」に関係する授業科目の調査を行った。ウェブ上におけるシラバスや授業科目一覧などの授業内容の公開形態や書式は各学校によってさまざまであるが、大学のPRや情報公開の場として各大学が力を入れて作成している事がうかがえた。この調査により愛知東邦大学から見た他大学の「音楽」の授業のあり方を客観的に捉えて、今後のシラバス作成や授業計画に活かす事を目的とする。

(2) 分析の結果

1) 授業科目名について

授業科目について表4-1に示す。調査対象である33大学で開講されている「音楽」に関する教科の中から、ウェブシラバス上で検索可能であった156科目の名称を調査したところ、大きく分けると3つの分野に分類できる事が明らかになった。1つ目は「ピアノ」「弾き歌い」や音楽理論について教授する「楽典」を中心とした「実技」に関する教科であり、授業科目名には「音楽」「基礎技能」「器楽」などの語彙が主に使用されている。幼稚園教育要領でいうところの「感性と表現に関する領域」である「表現」の「内容」において、「幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる」と記されているように、教師自身が音楽に親しみをもち楽しむことや基礎的な音楽性やリズム感を養うことを前提として、「実技」に関する科目が設定されていると考えられる。2つ目は「表現」のうちの「音楽」についての科目であり、主に「保育内容」「表現」という語彙が多く使用されていた。この科目に関しては「造形」「身体表現」「音楽」の3つの分野によるオムニバス形式の授業を行っている大学が多い。3つ目は、主に小学校音楽における子どもの音楽活動を教授するための、教科又は教職に関する「教科教育法」の科目であり、授業科目名としては「音楽科教育法」「初等音楽科教育法」などの語彙が多く使用されていた。

ほとんどの授業科目名が「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」や「音楽科教育法Ⅰ」「音楽科教育法Ⅱ」というように前期と後期にわたって通年で履修したり段階的に履修したりする形になっている。全体としては「音楽」という語彙を使用している大学が大半を占めている。ただし科目名は大学によって少しずつ違っており、それらの科目名から授業内容を明確に読み取れるものが多い。本学における「音楽」に関する授業科目は「実技」に関わる科目として「幼児の音楽」「音楽演奏技術」「音楽表現技術」「音楽応用演習」、また「保育内容」の「音楽」に関わる科目として「音楽表現指導法」が設定されているが、これらの科目名から授業内容を読み取る事がやや困難である。この点は今後の課題である。

表 4-1 授業科目の名称

教科に関する科目	科目数
音楽	25
基礎技能 ソルフェージュ	6
こどもと音楽 音楽と楽器	5
器楽	4
こども音楽	4
声乐	3
音楽基礎	3
表現技術 音楽表現	2
音楽表現	2
初等音楽	2
子どもの音楽	2
基礎ピアノ	2
ピアノ実習	2
音楽実技 基礎・ピアノ	2
保育の音楽表現 音楽	2
音楽演習	2
乳幼児の音楽演習	2
音楽専門研究	2
小学校専門音楽	2
初等音楽科内容学 器楽	2
小計	76
教職に関する科目	科目数
音楽科教育法	11
保育内容 表現	9
初等音楽科指導法	6
音楽科研究	3
音楽科教育論	3
保育内容演習 表現	2
保育内容論 表現	2
保育内容の指導法 表現	2
幼児の音楽・身体表現指導法	2
初等音楽科教育法	2
音楽科教育	2
音楽科指導法	2
その他	34
小計	80

2) 授業の概要について

授業の概要について、シラバスにおける項目として「授業概要」という表現が多かったが、大学によって「授業の目的と概要」「授業の観点」「授業の目標」などさまざまであり、シラバスの様式が大学ごとに異なっていて、着眼点に違いがある事が分かる。先に述べた3つの分野に分け

て授業の概要をまとめてみると1つ目の「ピアノ」「弾き歌い」「楽典」などの「実技」に関する教科における授業の概要に着目すると、「演奏」「実技」「実践」という語彙の他に「ピアノ個人レッスン」という語彙が多く使われていた。やはり実技指導をするにあたって個々の能力に合わせた個人レッスンはとても効果的であると考えられているようで、非常に多くの大学が個人レッスンという形態を取り入れている。2つ目の「表現」のうち「音楽」に関係する授業科目については「表現活動」「幼児と音楽表現」という語彙が多く使用されていた。「造形表現」「身体表現」「音楽表現」によるオムニバス授業について多く記載されており、音楽表現だけにとどまらず造形表現や身体表現との総合的発展を授業の目的としている事がうかがえる。3つ目の教職に関する教科については「教材研究」「授業計画」「模擬授業」という語彙が主に記載されていた。この科目では小学校教員として必要な音楽の知識を理解する事や指導計画を立案して模擬授業を実施することが多く取り入れられていた。そしてこれらの授業で行われる「教材研究」の部分でも多く使用されていた楽器が、鍵盤ハーモニカとリコーダーであり、保育者を目指す者としてそれらの楽器の使用法や教授方法を実践する事が重視されていることがうかがえた。

3) 区分・単位について

表4-2に見られるようにピアノや弾き歌いのレッスンなどの実技関係の教科は半数が1単位であり前期と後期を続けて履修する形態が多くを占めていた。これはピアノ実技を半期のみの短期間で終わらせるのではなく、継続的に長い期間学ぶ方が技術の向上においてより効果的であるという考えをもとにしていると捉えることができる。また講義や演習を含む授業形態をとっている授業は、主に音楽の教科についての学習に関係するものが多かったが、そのような講義を含む授業は2単位であるケースが多いようだ。

表 4-2 授業の単位数と授業形態

		単位数			合計
		1単位	2単位	不明	
形態	講義	1	35	13	49
	実技	28	14	3	45
	演習	1	23	9	33
	講義、演習	8	9	0	17
	講義、実技	4	4	2	10
	実技、演習	1	1	0	2
	合計	43	86	27	156

4) 対象学年について

受講者の対象学年は表4-3に示すように、2年生が最も多く、次いで1年生、3年生となっている。全体的な傾向としてはピアノや弾き歌いの実技の授業については1、2年生で受講し、

音楽の教科研究に関する授業は2、3年生で受講している。その結果として2年生に音楽の授業が多く重なったと考えられる。1、2年生で実技系の教科を履修して音楽的な経験を多くすることで、その後に控えている実習に活かすという意図があるのではないかと考えられる。一方で、3年生から4年生の2年間でピアノのレッスンを受講する機会は少ない。

表4-3 対象学年

学年	科目数
1年生	35
1年生以降	4
2年生	49
2年生以降	9
3年生	28
3年生以降	3
4年生	7
不明	21
合計	156

5) 教科書・参考図書について

教科書・参考図書についてはほとんどの科目において指定されている。「幼稚園教員採用試験では、公立、私立を問わず、保育士採用試験に比べてピアノ実技が重要視され、上級の『ブルグミュラー』『ソナチネ』が課題として指定される傾向にあります。小学校教員採用試験の課題は、小学校歌唱教材の弾き歌いという都道府県が多く、次に『バイエル』が続きます」（深見ら、2007）と示される状況を背景に、ピアノの個人レッスンには「バイエル教則本」または個人のレベルに合わせた楽譜を適宜指示するという形をとっている大学が多い。弾き歌いでは『こどものうた200』（チャイルド社）、次いで『こどものうた100』（チャイルド社）が多く使用されていた。「保育現場が求めているピアノ演奏能力は、童謡・子どもの歌・生活の歌などを演奏する力であり、その技術的レベルはバイエル程度である」とする東ら（2007）の指摘に合致した教科書となっている。また保育内容に関係する授業においては「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」が多く使用されている。

表4-4 教科書についての記載

記載の有無	科目数	
記載あり	指定教科書有	114
	適宜指示	33
記載なし		7
不明		2
合計		156

6) 担当教員について

科目担当者の内訳を表4-5に示す。多くの大学で音楽関係科目に専任教員が配置されている。特に実技科目においては、専任教員に加えて多くの非常勤講師を配置して授業を運営していることがうかがわれる。

次に表4-6に、授業担当者の背景について、ウェブで読み取れる範囲で調査したものを示す。最も多かったのは「ピアノ」を専門とする教員であり、次いで「音楽教育」「声楽」が多い。「管弦楽器」を専門とする教員の内訳は、「クラリネット」、「トランペット」、「サクソ」、「チェロ」であり、さまざまな楽器を専門とする教員がいる。それぞれの専門分野を起点としながら、保育者を養成するという職務を遂行していくには、そのキャリア形成において多くの課題があると思われる。

表4-5 科目担当者内訳

専任・非常勤の別	人数
専任 教授	62
非常勤講師	10
不明	5
合計	77

表4-6 科目担当者 専門領域

専門領域	人数
ピアノ	20
音楽教育	17
声楽	12
作曲	6
音楽学	5
教育学	5
管弦楽器	4
表現	2
指揮	1
不明	5
合計	77

7) 授業計画について

授業計画については先に述べた3つの授業内容によって大きく違いがあることがうかがわれる。

1つ目の「ピアノ」「弾き歌い」「楽典」などの実技に関する教科では、「楽典」と「ピアノ」のレッスンを平行してコンスタントに行う授業計画が多い。楽譜を全く読めない状況でピアノの練習を重ねても、教育実習や実践で、過去に演奏した経験がある曲だけしか弾けないという状況に陥ってしまうことを踏まえた構成であろう。また15回の授業の中で中間発表、期末発表と

いう形態をとって人前で演奏する機会を作っている学校がほとんどである。1年生のうちに「楽典」と「ピアノ」の基礎技能を身に付け、2年生になってからそれを土台として「弾き歌い」に挑戦するという形が定着しているようだ。

2つ目の「表現」のうちの「音楽」の授業計画については先に述べた様にオムニバス形式の授業が多く、15回の授業を「音楽」と「身体表現」をそれぞれ半分ずつ行う授業計画や、同じく「造形表現」と共に行うものが多かった。前半でリトミックを中心とした音楽表現活動、絵描き歌、指遊びなどをやる事で子どもの音楽表現活動について理解して、後半で指導案を作成して表現活動を体験する形態や、音楽劇をクラス全員で創作するという形態が多く見られた。

3つ目の教職に関する科目「教科教育法」では、まず音楽科指導に必要な知識や指導法を学ぶ事をねらいとして、鍵盤ハーモニカ、リコーダーなどの楽器の演奏についての実践や、授業計画を立てて指導案、指導法を習得した上で模擬授業を実践するというものが多く見られた。

(3) 分析のまとめ

保育者養成課程の音楽に係る授業は、「実技」、「表現」のうちの「音楽」、「音楽科教育」の3つの分野に分類できること、教職に関する科目数よりも教科に関する科目数がかなり多いことが分かった。これは音楽の分野では子どもの見本となって歌を歌う事や、ピアノの弾き歌いを通して子ども達と音楽活動をするために、まずは学生自身がスキルアップをする事が大切であるためだと考えられる。

授業概要としては、主に実技系教科においては「ピアノ」や「弾き歌い」の個人レッスンと共に「楽典」を取り入れている大学が多くあり、楽譜を読む力の育成にも力を入れていることがうかがわれた。アンサンブルの経験を重要視してピアノの連弾を取り入れている大学も見られた。半期で15回の授業の中でピアノのレッスンと楽典の両方をいかにバランスよく導入するかという点はこれからの養成校において大きな課題となる。「保育内容としての音楽」に関する教科ではオムニバス形式による授業形態が比較的多く、「音楽」のみにとどまらず「造形」や「身体表現」との総合的発展を目的としている傾向があることが明らかになった。また教職に関する科目においては、特に小学校教員養成課程を併設している場合に、必要な音楽の知識を得ることや指導計画の立案、模擬授業が多く取り入れられていた。

授業区分・単位については、実技系科目において1単位だけの科目が多く、講義を含む科目は2単位である場合が多い。授業の対象学年については2年生が最も多く、ピアノや弾き歌いの実技の授業についてはほとんどが1、2年生で実施する傾向が見られた。教育実習や保育実習の準備という意味合いが付与されていると考えられる。

教科書・参考書については実技系教科では「バイエル教則本」と『こどものうた200』、保育内容の音楽の教科では「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」が多く使用されていた。適宜指示と記載がある授業の中には、個人の実技の進捗を確認した上で、練習曲目を決定して楽譜を配付するという形態をとる大学が多かった。

科目担当者の専門分野で最も多かったのは「ピアノ」、次いで「音楽教育」「声楽」を専門とする教員であることが明らかになった。

授業計画については先に述べた3つの授業内容によって大きな違いが見受けられ、まず1つ目の実技系の授業では「楽典」と「ピアノ」のレッスンを平行して行う授業計画が多い。また人前で演奏する機会を作っている授業が多い。2つ目の「保育内容の音楽」の授業計画については、オムニバス形式の授業が多く、15回の授業を「音楽」と「身体表現」、「造形表現」と共に行うものが多く見られた。そしてこの教科においては前半で子どもの音楽表現活動について理解して、後半で指導計画を作成して表現活動を体験する形態が多く見られた。3つ目の教職に関する科目「教科教育法」では、まず音楽科指導に必要な基礎知識を学び、子どもが使用する楽器の使用法や演奏について実践をする、そして最後に授業計画を立てて模擬授業を実践するというものが多かった。

(西濱由有)

5 まとめ

(1) 研究のまとめと課題

以上、ウェブ上の、限定した地域の入手可能な範囲のシラバスとその内容から、表現関係科目の教育内容について、科目名称、教育課程上の位置づけ、教科書、担当教員の属性等から分析してきた。

詳細は各節に譲るとして、ここでは、全体を通じて明らかになったことをまとめる。第一に、科目名称に幅があるということである。科目名称は多様ではあるが、概ね似通った語彙で構成されている。その中で、わずかではあるが、大学あるいは担当者の独自の考え方や方針からか、非常に独特な科目名称が、特に造形表現科目に関して見受けられた。

第二に、担当者の属性の違いが教育内容の多様性に大きく影響している可能性が高いということである。これは大学としては当然のことであるが、教職課程や保育士養成課程において、系列や科目等のそれぞれについて教育内容に一定の縛りがあることを考えると、予想より多様であるといえる。特に言語表現科目は、担当者の背景が他の2領域に比べてかなり多様なため、教育内容もバリエーションに富んでいる。

第三に、保育現場を意識した内容が（おそらく以前より）多く取り入れられており、保育士養成課程において「基礎技能」とされて実技の技術的な訓練といった意味合いがまだ強かった時期と一線を画しているのではないかと思われる。「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」を参照する科目も多い。一方で、音楽表現科目においては、ピアノの実技レッスンを内容とするものが多くある。ピアノが、基本的な技術がなければ形にならないものであり、また幼稚園・保育所等の採用試験において依然として一定の比重で取り上げられる表現技術であるという状況を反映していると思われる。

(2) 本研究の課題

シラバスを見る限り、表現関係科目の教育内容は多様である。このことをどう捉えるべきなのかについては議論が必要である。保育者養成の質保証の必要性からくる教育内容についての一定の縛りと、大学教育の豊かさを保障するための担当者の専門性を生かした多様な教育内容とを、どのようにバランスしていくのか、担当者レベルでなく、各大学で、カリキュラムデザインの観点から検討していく必要がある。

また今回は、ウェブ上で入手可能な範囲という限定付きの調査であり、検討は緒についたばかりである。今後、子どもの十全な発達を促す表現活動という観点から、教育内容のうちでより有益なポイントに焦点化して精査していく必要がある。

今回シラバスを検討するなかで、15回の授業の構成に特徴が見られることが分かってきた。この点について詳細に検討して分類するなどによって、授業の進め方のデザインをより適切に検討していくことができるだろう。

本研究は、シラバスを調査の対象としたので、授業実践上のリアルな課題に迫るものではない。シラバスの検討をさらに進めた後に、担当者への調査などを通じて、実践との関わりについて検討していく必要があると思われる。

(矢藤誠慈郎)

註

[1] 「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」では、「(4) 改正の内容」の「③教科目の名称の変更等」において、「『基礎技能』を『保育表現技術』とする」として、その理由を、「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要であることを踏まえ、このような子どもの表現に係る保育士の保育技術を修得する教科として「保育(の)表現技術」に名称を変更する。また、現行の「基礎技能」の内容にある音楽、造形、体育を、音楽表現、造形表現、身体表現、言語表現とするが、これらに関する表現技術を保育との関連で修得できるようにすることが重要である」としている。

引用文献

東ゆかり、白川佳子（2007）「保育士養成校における授業カリキュラムと就職試験の内容との関連性についての一考察」『鎌倉女子大学紀要』第14号、74頁。

小山正（2006）『ことばが育つ条件』培風館。

西本鶏介（2003）『子どもがよるこぶ！読み聞かせ101冊ガイド』講談社。

浜島代志子（1984）『絵本学のすすめ』偕成社。

深見友紀子、小林田鶴子、坂本暁美（2007）『保育士、幼稚園・小学校教諭を目指す人のために この一冊でわかる ピアノ実技と楽典』音楽之友社、8頁。

伏見強（2008）「保育者養成校における音楽系科目のシラバス充実のための一考察—日本保育学会第61回大会を俯瞰して—」『京都文教短期大学研究紀要』47、11-21頁。

無藤隆編（2008）『ここが変わった！新幼稚園教育要領改訂のポイントと解説』チャイルド社。

受理日 平成24年10月1日